

慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resources

Title	ウィーン国立民族学博物館蔵『西行記』（秋・冬）解題・翻刻
Sub Title	
Author	辻, 英子(Tsuji, Eiko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2007
Jtitle	三田國文 No.45 (2007. 9) ,p.58- 78
JaLC DOI	10.14991/002.20070900-0058
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20070900-0058

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ウイーン国立民族学博物館蔵

『西行記』(秋・冬) 解題・翻刻

辻 英子

はじめに

本稿は、『三田国文』第四十三号に掲載した『西行記』(春・夏)に続く、『秋・冬』の巻の本文の紹介である。詞書の翻刻の後に、采女本系の本文である統群書類従類本および渡辺家本の詞書の内容の配列順序を一望できるように比較一覧を編んだ。これは、翻刻を提示するに当たり、錯簡箇所を補うためであり、抜本的な原本復元の試みではない。絵については、渡辺家本およびセンチリーミュージアム本を参照しながら、同様の試みしてみたが、三者間の錯簡の状況は複雑で、後日稿を改めたい。

ウイーン国立民族学博物館蔵『西行記』詞書

(秋)

むかし申なれたりし人の世
のかれてふしみにすみ侍しを

たつねまかりてにはのくさふ
かゝりしあはれにおほえてよみ
侍し

わけている袖に

あはれをかけよとて

つゆけきにはに

あきかせそ

ふく (第1紙)

(絵一) (第2紙)

かくまとひありく程にすみなれ

しふるさといかゝなりぬらむあり

しむすめもさすかに心にかゝりて

そのかとをすくとて見いれければ

このちこ六七歳はかりにてたてし

とみのもとにつちあそひして

たてるをつくくゝとあはれに

みるほとにこしき法師の見

るかおそろしやとてうちへにけ
いりにけり妻子珍宝もおもひて
すきにけり (第3紙)

〔絵二〕 (第4紙)

ともに出家したりし西住か心をみん
とやおもひけむ頭陀はこれ第一の行
なりけうまむのはたほこをたをして
善人のかたきをうつと仏とき給へり
とてふたり乞食ゆくほとに西住かめ
とのもとへゆきて経をよみたてればうち
になきあひたりつれく経(つと)をよめは
白米をぬり桶のふたにいでてとしころ
つかひし女なくくもちち(お)てきたり袖を
ひろけてうけてかへるときにうちより
こゑもおしますなく中めの声も
しつゝ又いとをしかりし子の父にゝたる
とてなきければ西住聞てたへすやす
みそめの袖をしほりけり西行見つゝ
かく心よはからんには我同行には
かなはしとてはなれにけり (第5紙)

〔絵三〕 (第6紙)

松風あきのことしといふ事を
北白河にて人々よみて又水声

に秋ありといふことをかさねけ
るに

松かせのをとのみなら

すいしはしる

水

にもあきは

みえけるも

のを (第7紙)

〔絵四〕 (第8紙)

むかしこゝろさしつかうまつりし
ならひにて世のかれてのちも賀茂
の社へまいることにてなむとし
たかくなりて四国のかたへ修行
すとて又かへりまいらぬことにて
もこそはとおほえて仁安三年十月
十日の夜まいりてへいまいらせ
しにうちへもいらぬことなれば
たなをのやしろにとりつき「(き)」
たてまつり給へとて心さし侍りし
にこのまの月ほのくゝに常より
もあはれにおほえて

かしこまるしてに涙のかゝる

かな又いつかはとおもふあはれ

に (第9紙)

〔絵五〕 (第10・11紙)

小倉山のふもとにて煉の哥あ
また読侍りしにおほるかには
もみちなかれてゐせきのな
みことに色ふかくけいきこゝろ
にそみて秋のおはりのなこり
おしくそおほえける

おほるかはゐせき
によとむ水の色
に

あきふかくなる

ほとそしら

るゝ (第12紙)

〔絵六〕 (第13紙)

侍賢門院の中納言のつほね世の
かれてをくら山のふもとにすまれ
しことからいふにあはれなり
かせのけしきさへことにおほえ
て

やまおろすあらしの

をとのけはしき

を

いつならひける

きみかすみか

そ

(第14紙)

〔絵七〕 (第15紙)

ひろさはのあむ室にひとりをこなひ
けるころよみはんへりし

さひしさにたへたる

人の又もあれ

な

いほりならへん

ふゆのやま

さと (第16紙)

〔絵八〕 (第17紙)

都ならねともとのくれには

人くわれもくといそきあひたり

けるをみるもあはれにて

つねよりもこゝろ

ほそくそおほえ

ける

たひのそらにて

としのくるゝ

は

うき身こそいとひ

なからもあはれ

なれ

月をなかめて

としのくれ

ぬる (第18紙)

〔絵九〕 (第19紙)

世中あらぬさまになりて後 新院
御くしおろして仁和寺の北院に
をはしますなりと聞てまいりたり
しに憲賢阿闍梨いてあひたりしに
月あかくてなにとなく心もあらぬ
やうにてあはれにおほえければ

かゝる世にかけも

かはらてすむ月

を

みるわか身さへ

うらめしき

かな (第20紙)

〔絵十〕

(第21紙)

おしむにとまらぬ日かすなりけれ
は花は根に帰とりはくもにいり
はてゝなにゝともなふへくもな
くものつれゝなるに卵花くたし
さへふるさとのつきはかこちかほ
にて墨染のたもとうちしめりか
ちに侍りければ無言をはしめて西を
おかひけるころ時鳥のはつねを

きゝて

郭公人にかたらぬ

おりにしもはつね

きくこそかひ

なかりけ

れ (第22紙)

〔絵十一〕 (第23紙)

こゝろにまかせぬ命なりければ
都に帰きたりて見れば其いにしへ
なれしすみかもことやうになりてい
つくをやとゝさためたれをととむす
ふへしともおほえてあゆみゆくに
ぬしなくなりたりし泉をつたへて
ゐたりし人のもとにまかりて
いつみにむかひてふるきをおもふと
いふことをよみ侍しに

すむ人のこゝろくま

るゝいつみかなむ

かし

をいかにおもひ

いつらむ (第24紙)

〔絵十二〕 (第25紙)

はりまの書写へまいるとて野
中のしみつ見侍しことのひとむ

かしになりてのち修行すとして
とをり侍りしにおなしさまにて
かはらさりければ

むかし見し野なか

のしみつかはら

ねは

わかかけをもや

おもひいつ

らむ (第26紙)

〔絵十三〕 (第27紙)

さぬぎにまうて、松山津と申所
に新院おはしましけむあとを

尋侍しにかたもなかりければ 松

山の浪になかれてこし船のやかて

むなしくなりにけるかなとうち

なかめてしろ峯と申所の御はか

にまいりてみればいつこそ人かよひ

たりともみえさりしかは昔は九重の

たまの台にすみたまひ一天の主と

して百官にいねうせられいまはや

えのむくらのしたに三途の闇にまよひ

給はんかしさいへんよにふるひいせい朝

にかまひすしかりし人ひとりとして

つきたてまつる事なし及王位の理

おもひしられて

よしや君昔のたまのゆかとても
かゝらむのちはなに、かはせん (第28紙)

〔絵十四〕 (第29紙)

同国善通寺と申山にすみ侍し

に庵の前なる松を見てひさに

へてわかちの世をとへよまつあと

しのふへき人もなき身そとなかめて

土佐の方へやまかりなましとおもひ

かりなつかしくて松ものいひせは

いかばかりなるちきりましとおほえて

こゝを又わかすみうくて

うかれなは松はひとりに

ならむとすらむ (第30紙)

〔絵十五〕 (第31紙)

命は心にまかせぬものなりければ

ふたゝひふるさとかへりきつゝ

都にしりたりし人くゝのもとをたつ

ぬるにあるはなくなきはかすそふ

世のはかなさすみなれしやとはよも

きかそまとなりはてゝすゑの露は

日かけをたにもまたぬもとの

しつくなり

古郷のにはのこまつに

としふりて

木すゑに焮の

あらしをそ

きく (第32紙)

神無月のはしめのころ法金剛院

のみみし見侍りしに上西門院おは

しますよし聞て待賢門院の御 (第33紙)

事おもひいてられて兵衛とのゝ

つほねへさしをかせ侍し

もみちみてきみかたもとや

しくるらむむかしの焮の

いろをしたひて

かへし

いろふかきこすゑをみて

もしくれつゝふりにしことを

かけぬまそなき (第34紙)

(絵十六) (第35紙)

(冬)

奈良の興福寺にまいりて侍り

しにおりからにやさる沢の池

の波あはれたちそふ心ちして

ゆふかなしき風のけしきもなに

事としもなく心すみ侍りに

うねめか身なけし昔おもひい

てられて月をなかめてよみ侍

りし

あはれなるたまも

なみよるさるさは

の

いけにむかしの

月をみるか

な (第1紙)

(絵一) (第2紙)

天王寺へまいりけるにかた野と申

わたりすきてみはるかしたるとこ

ろのあるをとひければあまの河と

いふをきゝてやとからむといひける

事おもひいてられてよめる (第3紙)

かりくれしあまのかはら

ときくからにむか

し

のなみのそて

寂然かうやにまいりてふかき「脱字アリ」 (第4紙)

ののみちといふことを宮の法印

の御あむしちにてよむへきよし

申侍りしにまいりあひて

さまくのにしき

ありけるみやま

かな

はな見しみねを

しくれそめ

つゝ (第5紙)

〔絵二〕 (第6・7紙)

大峯の持経者の宿に平等院の

名かゝれたる卒都婆の侍りけるに

もみちのちりかゝりけるを見て花

よりほかのとありける人そかしと

あはれにおほえて

あはれとてはなみ

しみねになをと

めて

もみちそけふは

ともとなりぬ

る (第8紙)

〔絵三〕 (第9紙)

おほろけならぬ雲の浪けふりの

なみをしのきて笙のいはやにこも

りたりければ平等院の僧正のもら

ぬいはやも袖はぬれけりとよまれけん
おもひいてられて

露もらぬいはやも

袖はぬれけり

と

きかすはいかに

あやしから

まし (第10紙)

〔絵四〕 (第11紙)

都に昔ゆかりある所にとまりて

こしかた行すゑの物語しつゝ袖を

しほりしにあるしのさてもさはかり

いとをしかり給しひめ御せむの

御事のあはれさよ御出家のゝち

その日のうちに御前はさまかへて

一二年は京におはせしに九条の (第12紙)

民部卿のむすめ冷泉殿と申人の

子にしてよにいとをしくし給しかは

母は高野のあまののをこなひて

この十七年は人をたにもかよはし

給はすこの程は冷泉殿のむかひ腹

のむすめ播磨の三位と申人御こに
とりたる上臈にこのあねきみ

おはして侍りあけくれはおこな

ひのみして仏神に今生にて父

母のゆくゑしらせさせ給へと申て

なくよりほかの事おはせずと

かたりければ涙くみて聞かれ

ぬさまにそもてなしける (第13紙)

(繪五) (第14紙)

西行いかゝ思けんそのつきの日冷泉

とのゝそはなる小家にまかりて

あるしをかたらひてこの娘を

よひければむすめわかちゝこそ道心

をおこしたりとはきけとていてゝ

みればみもならはぬこきすみそめの

ころもにやせゝなる姿をさはわ

かちかとおもふに涙もとゝまらず

みる程にさい行ありしつちあそひ

のすかたにはおひかはりてけたかくいみ

しくみゆむすめにいふやう年来はゆ

くゑもしらすりにけふこそはみたて

まつれおやとなりことなるは前世の契

なりわか申さむ事きゝ給てむやといへ
はまことにおやにておはしまさはいかてか
たかへまいらせ候はむといふうれしとおも

ひていとけなくおはしましゝ時こゝろ
はかりはいやしからすもてなしか

しつきおもひて院内裏へもまいら (第15紙)

せいかにもとおもひしにわか身

かくなりてあれともこゝろのみた

るゝ事は御ゆへなりさしもなきみや

つかひよしなし人にあなつらるゝ

事なりこの世はゆめまほろしのこと

としけふある物はあすはなしさかり

のかたちおひをとろふる事ほと

なし只あまになりて母にともなひて

後世をとり給へ極楽へまいりてとくゝむ

かへむといへはこのむすめしはしあむし

てうれしき事也父母にもそひまいらせ

ぬ身なれはいかなるひまもかなさまかへ

んとおもひしと申てしかゝの日のめ
とのもとへそこゝとちきりて帰ぬ (第16紙)

(繪六) (第17紙)

このむすめその日になりぬれば

かみなとあらひてまつほとに

くるまよせていてむとする時

しはしとてかへり入てれんせい

とのをつくゝとまもりて涙

くみていてにけり (第18紙)

〔絵七〕 (第19紙)

西行むすめをむかへとりてたけ
なるかみをゆひわけて出家とけて
のちよろこひ申けりわか俗の時
世路をわしりて地獄のすみかをたつ
ねて出仕けうまむのほこりをよろ
こひて衣の玉をしらす妻子のむつひ
珍宝のたくはへに心ひかれて火宅
のすみかをいつる事なし煩惱の黒
きくもあつくして名利の家の犬
うてともさらす因果の白毫はくら
くして菩提の山の鹿まねけともきた
りかたしとめるをみてはうらやみま
つしきを見てはにくみ夢のうちの
夢眼のまへのつねなきに心の月をすま
せとも御ゆへをおもふにはふた世のみ
ちまとひぬへかりつるを今すてに
出家をとけたまふをみつ今生の願
みちて当來の望たつしぬへしと
申て極重悪人無他方便唯称弥陀
得生極樂この文を常にとなへたまふ
へし今生にてあひ申さむ事 たゝ
いまはかりなりこれを臨終最後の
教化とおほせとなくく申ければ尼〔二紙分相当ノ脱文〕(第20
紙)

〔絵八〕 (第21紙)

さて冷泉とのほまちかねて人をむかへ
にやりければはやさまかへていて給
ぬるよし聞てこの人のむつとし
よりやしなひてかた時もはなるゝ
ことなかりしにくちおしくとうらみ
けりたゝしいてさまにまもりし
事のみそさすかにと涙をなかし
けるさてさい行はかくそなかめ
ける

きえにけるもとの

しつくをおもふ

にも

たれかはすゑの

つゆの身なら

ぬ (第22紙)

〔絵九〕

(第23紙)

山さとにひきかへたるすまひよそ
めはこゝろほそく見えけれ共西行か
心にはおもひまする事なく一向に
ねむ仏のこうをつみて仏の來迎を
まちたてまつるよりほかには又おも
ふ事なかりければおもひたゝさりけむ
そのさきくやしく覺えて
やまさとにうき世

いとほん人も

かな

くやしくすきし

むかしかた

らむ (第24紙)

〔絵十〕 (第25紙)

同行に侍聖人をはりよくてかくれぬと聞て寂然かもとよりよみてつかはしたり

みたれすとをはりきく

こそうれしけれ

さてもわかれば

なくさまねと

も

返し

この世にて又あふ

ましきかなし

さに

すゝめし人そ

こゝろみた

るゝ

(第26紙)

〔絵十一〕 (第27紙)

そのきさらきのもち月のころといひ

けるにあはせて花のみやこまちか

き雙林寺東山のほとりにて往生の

期を待ちえてけり峯のさくらも

さかりなりにはの桜もさかり也異香

空に薫してのきはの梅にうちたくひ

音楽くもに響て谷のうくひす音を

そふる時忍辱の衣の露すてにきえ

慈悲の月たちまちにあきらかなり

一百遍の念仏已成就之處廿五の菩薩

の摩頂に預紫雲のたえまより金色の

光かゝやきて観音蓮台をかたふけて

出現したまへり踊躍歡喜のあまり一首の

哥をよみける

ほとけには桜の花をたてまつれ

わかのちの世を人とふらはゝ

〔絵十二〕 (第29紙)

ありしむすめはあま野にたとりつき

て母とともに念仏申ている

月をみては浄土のみちのしるへと

おもひおつるはなをみては娑婆

のことわりをさとりおほかた心つよき

ものにてともに仏道をとりに

けり (第30紙)

〔繪十三〕 (第31紙)

さて西行か妻女の尼おとこにをとら
さりけり廿三のとしおとこ出家しけ
れはやかて髪をおろしてかうやの尼
野に入籠しより後はあい親人のも
とより文つかはしけれども返事もせ
ず常に無言にておこなひけり
此娘のあまを善知識にして終の
ときおほえて千遍の念仏申て
吳香宛満して往生遂てけり又
此むすめのあまは父母にもまさりて
心動かしこきものなりければ一生不犯
の身にて正治貳年彼岸に高声念仏
となへてわうしやうをとけてけり三人
おなし蓮の実となりたる事の目
出さ譬なきものなり西行うせて後
都のうちに哥よむ人々涙をなかし
あはれみて花さかりにはことに
あはれひあひけりその中に左近
中将定家朝臣菩提院の三位中将の
もとへ西行か往生の事申遣ける
にかくそよまれける

もち月のころはたかはぬ空なれと
きえけむ雲のゆくゑかなしな

返事

紫の雲ときくにそなくさむる

きえけん人はかなしけれども

そのころ西行か訪に京中の詞仙

達集て一品経書写してとふらひけり (第32紙)

『西行記』および『西行物語繪巻』現状一覽

『西行記』(ウィーン国立民族学博物館蔵本)および『西行物語繪巻』(『統群書類従』所収本・渡辺家蔵本)の祖本は室町時代作で、采女本と通称される。宗達本の「西行物語繪巻」が、旧毛利家蔵本と渡辺家本の二本を伝えていることは、早くから知られていた。この旧毛利家本には、巻第四の巻末には、烏丸光広の筆で、奥書が加えられている(現在、四巻とも出光美術館蔵。重要文化財)。それによれば、禁裏御本たる海田采女佑本により、宗達が模写した次第が明らかである。小松氏が指摘されているように、旧毛利家本および渡辺家本「西行物語繪巻」は、『統群書類従』本所収の「西行物語繪詞」の本文に適合するところが知られる。ただし、渡辺家本には、『統群書類従』本と比較して、錯簡が少なくない。『統群書類従』本は、宮内庁書陵部に所蔵する『西行物語繪詞』(江戸時代の写本で、絵を省略、当該箇所「繪」と表示。その内容は不明。詞書のみ二冊本)を底本としたもので、その奥書に、次のようにある。

右此四巻画図者海田采女佐源相保

所筆也。段々文字乃愚翁書焉。

明応龍集^{庚申}上陽月中浣日

槐下桑門

これは、明応九年（一五〇〇）正月中旬のある日に「槐下桑門」某が記したという意味である。これによって、海田采女佑源^{みなもとのすけゆき}相保筆の識語を有する采女本を転写した一本であることが知られる。「西行物語絵巻」の一本狩野養信^{かのの つかのぶ}（清川院^{せいせんいん}へ一七九六一八一九）模写本にも同様の奥書を有する。この「龍」について小松氏は、

どうやら、三条公敦^{さんみちあつ}へ一四三九一—一五〇七³が、もつとも妥当の人物と推定される。（略）院号は竜翔院^{りゅうしょういん}。かれは、当時、名だたる書き手の一人で、その書流は、「三条流」につらなつた。

としている。「集」は「編纂に当たったことを「集」の語でいう⁵」例であろう。とすれば、この語は「西行物語絵巻」模写時の様子をも示唆していることになる。

渡辺家蔵本について、小松氏は、『日本絵巻大成 26』の中で次のように述べている。

毛利家旧蔵本は、詞書・絵・詞書・絵……というように、詞書と画面を交互にくり返しながら、四巻の巻物に仕立てられている。が、渡辺家本のほうは絵と詞書は別々に、それぞれ仕立てられている。したがって、各画面が、『西行物語』のどの場面を描くものなのか、また、それに相応する詞書が、どの部分なのか、それを彼此探索するのに骨が

折れる。渡辺家本が、なにゆえに、このような調巻になっているのか、まことに不思議のかぎりである。⁶

このように、采女本は複雑な問題を含んでいる。千野香織氏は、

采女本については、別に詳しい復元的考察が必要である。原本が四巻か五巻かという点も不明であり、また、詞書と絵を正しく対応させることができない段も存在する。⁷としている。

以下にウィーン国立民族学博物館本の現状を報告するにあたり、渡辺家本および『統群書類従』本を対象し、民博本（以下、略称する）の下端に詞書の配列順、あるいは巻一段を数字で記した。『統群書類従』所収の「西行物語絵巻」は、各巻ごとの区切りは判然としないが、「四巻」から成る絵巻。しかも、「画図」（絵）は海田采女佑源相保^{うづらぬのすけゆき}が描いた由来を示している。⁸各絵巻とも本来章段はないが、便宜上通し番号を入れ、対応する章段を示す。

渡辺家本は影印本（小松茂美編「西行物語絵巻」『日本絵巻大成 26』所収 中央公論社 一九七九）に拠った。渡辺家本の巻・段に併記した絵の頁数は、『大成 26』所収の掲載頁数を示す。場面は①・②のように記した。なお、○囲みの算用数字は、法量表に記した紙継ぎを表す。

かくまとひありく程に 絵二	24	25	I 9	命は心にまかせぬものなりければ (絵ナシ)(錯簡)	38	II 17
ともに出家したりし西住か心を 絵三	25	45	絵 68上〜69上	神無月のはしめのころ 絵十六	39	II 18
松風あきのことしといふ事を 絵四(錯簡)	26	27	II 1	(冬)	34	絵 72下〜73下
むかしこゝろさしつかうまつりしな らひにて 絵五①・②	27	28	II 12	奈良の興福寺にまいりて侍りしに 絵一	37	II 21
小倉山のふもとにて秋の哥あまた詠 侍りしに 絵六	28	36	絵 68下〜70上	天王寺へまいりけるに (絵ナシ)(錯簡)	29	絵 74下〜76上
待賢門院の中につほね世のかれて 絵七	29	35	II 19	寂然かうやにまいりて 絵二①・②	38	II 22
ひろさはのあむ室にひとりをこなひ けるころ 絵八(錯簡)	30	17	絵 75上〜74下	大峯の持経者の宿に平等院の名かゝ れたる 絵三	18	III 34
都ならねともとのくれには 絵九	31	46	II 33	おほろけならぬ雲の 絵四	19	絵 76上〜76下
世中あらぬさまになりて後 絵十	32	47	III 45	都に昔ゆかりある所にとまりて 絵五	39	III 35
おしむにとまらぬ日かすなりければ 絵十一	33	14	絵 83上〜82下	西行いかゝ思けんそのつきの日 絵六	40	II 23
こゝろにまかせぬ命なりければ 絵十二(錯簡)	34	23	絵 88下〜89下	このむすめそのひになりぬれば 絵七	41	II 24
はりまの書写へまいるとて 絵十三	35	30	II 30	西行むすめをむかへとりてたけなる かみを 絵八	42	III 41
さぬきにまうて、松山津と申所に 絵十四	36	31	III 39	さて冷泉とのはまちなかねて 絵九	43	III 42
同国普通寺と申山にすみ侍りしに 絵十五(錯簡)	37	32	II 14	山さとにひきかへたるすまひよそめ は 絵十(錯簡)	22	III 38
		37	II 15	同行に侍聖人をはりよくてかくれぬ 絵十一(錯簡)	51	III 51
		36	絵 70下〜71下		50	III 51
		35	II 16		49	III 51
		34	絵 71下〜72上		48	III 51
		33	II 17		47	III 51
		32	III 18		46	III 51
		31	III 19		45	III 51
		30	III 20		44	III 51
		29	III 21		43	III 51
		28	III 22		42	III 51
		27	III 23		41	III 51
		26	III 24		40	III 51
		25	III 25		39	III 51
		24	III 26		38	III 51
		23	III 27		37	III 51
		22	III 28		36	III 51
		21	III 29		35	III 51
		20	III 30		34	III 51
		19	III 31		33	III 51
		18	III 32		32	III 51
		17	III 33		31	III 51
		16	III 34		30	III 51
		15	III 35		29	III 51
		14	III 36		28	III 51
		13	III 37		27	III 51
		12	III 38		26	III 51
		11	III 39		25	III 51
		10	III 40		24	III 51
		9	III 41		23	III 51
		8	III 42		22	III 51
		7	III 43		21	III 51
		6	III 44		20	III 51
		5	III 45		19	III 51
		4	III 46		18	III 51
		3	III 47		17	III 51
		2	III 48		16	III 51
		1	III 49		15	III 51

と聞て			
絵十一	52	絵	絵11下
そのきさらきのもち月のころといひけるに			
絵十二	53	絵	絵92上く93上
ありしむすめはあま野にたとりつきて			
絵十三	54	絵	絵93上く92下
さて西行か妻女の尼おとこにをとらさりけり			
(絵ナシ)	(ナシ)	(ナシ)	
(奥書)	(ナシ)	(ナシ)	

右の一覧表作成に当たり、気付いたことを以下に述べる。必要に応じてセンチュリーミュージアム本についても提示する。民博本の段数は便宜上通し番号を用いる。

一 錯簡・脱字など

1-絵一：連続する絵を一面に数えたが、実は三画面からなる。民博本は、渡辺家本の「1-1」の絵に対応する。その詳細は、「絵一」の①は「60上」、②は「絵60上・61上く60下」、③は「絵60下・61下く62上・63上」に該当する。

○1・絵一②は民博本「第4紙」の詞書「鳥羽院の御時」の内容に対応する。渡辺家本ともに、佐藤兵衛尉範清が鳥羽院の北面に伺候する絵で、同画面を正姿とする。センチュリー本（以下、略称する）には、この絵は、「いまたその期やく」の段の後にあり、詞書「ことにきらめ

きて」(1-⑥)に対応する画面である)、と解説(15頁上段)する。

2 勅撰のかれかたきゆへに…この詞書に対応する画面は「1-絵一・③」である。

3 そのくれに…この詞書に対応する画面は「3-絵三①」である。「3-絵三②」の画面は、詞書「ことにきらめきて」(5-①)に該当する。

4 おなしく北面に…この詞書に対応するのは「4・絵四」である。「とし月をいかてわか身のをくりけん」(第20紙第12行)に続く欠失の詞書一行は、渡辺家本に「きのふみし人けふはなき世に」とみえる。同段「くの事なり」(第20紙13く16行)以下4行の文は錯簡で、(春)第三段「そのくれにやとへ」の詞書「おもはくむや」(第15紙17行)に続く。

5 ことにきらめきて…本段は民博本(第5段)・渡辺本(第6段)ともに詞書「ことにきらめきてまいたりければ」と「いまたその期やきたらさりけむ」とは同じ段に収め、絵は一面である。統群本は第5段・絵、第6段・絵とし、詞書と画面を交互に繰り返す体裁をとる。5-① この詞書に対応する画面は「3-絵三②・③」である。

○センチュリー本ではこれに該当する絵は、詞書「いまたその期やきたらさりけむ」のすぐ後にある。ただしその画面は、民博本「1-絵①・②」(渡辺家本も同じ)に該当し、画面と詞書の対応関係が異なる。

18・32 民博本の第18段(夏)「東の方さまへゆくほとに」と

第32段(秋)「世の中あらぬさまになりて後」はそれぞれ巻を別にする。渡辺本は、第46段「世中」、第47段「東の方さまへ」(第3行目と第4行目の間に第17紙の紙継ぎがある)の配列で、それぞれ民博本と同じ画面を配する。統群本は、渡辺本と同配列であるが、同段に扱い47段一面とする。センチュリー本には、「世の中」(巻第四7段)に該当する絵は、巻二第2段の詞書「こゝろにまかせぬ」の後に位置し錯簡である。「東の方さまへ」(巻第四9段)は民博本と同画面を配する。

松風あきのことしと……この詞書に対応する画面は「34、絵十二」である。

ひろさのはあむ室に……この詞書に対応する画面は欠失か。ここにある画面は、「山さとにひきかへたるすまひ」(「50、絵十」)に対応する。

こゝろにまかせぬ……この詞書に対応する画面は欠失とみられる。渡辺家本およびセンチュリー本にもない。『統群書類従』本にはある。

同国善通寺と申す山に……この詞書に対応する画面は、「50、絵十」である。

命は心にまかせぬもの……この詞書に対応する画面は「37、絵十五」である。

天王寺へまいりけるに……この詞書に対応する画面は「26、絵四」である。

西行むすめをむかへとりて……「教化とおほせとなくく、申ければ尼」(第20紙第23行)の後に一紙分相当の欠失が

50

想定される。渡辺本(センチュリー本もほぼ同じ)には次の文章がある。

なみた

をなかして我身五歳のとし父に
 はなれ七歳にて母にわかれて羽なき
 鳥よりもたとしく人におそろし
 とおもふ人の命をたかへしとあかしくらし
 侍り十二三よりは身の程おもひしられて
 出家の心さしふかく侍りきいまさいはいに
 そのおもひとけ侍りぬれば二せのゝそみ
 かなひぬこれ父の恩をかうふれり須
 みの倉にたからをつみて給ても
 一旦のゆめ也後世のわか身にしたかふへ
 からす今この要文教化の御詞
 浄土の道しるへと憑侍りて必一仏
 しやうとにまいりあはむとちきりて
 なくくわかれにけり

統群本・センチュリー本にも同文がある。なお、民博本の絵は全51図、統群本は53図である。この差は、前者は、「5、ことにきらめきて」および「41、天王寺へまいりけるに」の段に絵がないことによる。

山さとにひきかへたる……この詞書に対応する画面は「30、絵八」である。

二 詞書の異同

ウィーン国立民族博物館本(巻春・夏を含む)を軸に、「統群書類従」本、渡辺家本、センチュリーミュージアム本を略称で、近似度を探るために、同じ場合をカッコ内に、**⑩**、**⑪**のように記した。

(春)

・菩提心(必)統・渡・セ)勝(2・19)
 ・網をひく家をつくって(同) **⑩**、網をく家をつくりて 渡、綱をひく家をつくって 統)

・和須密多(「和」ノ字アリ) **⑩**・**⑪**、ナシ 渡)須密多か姪に(2・26)
 (2・28)

・三公九(同) **⑩**・**⑪**、統 卿(4・9)
 ・まもりて夜をあかし「脱文」(「四季にしたかひて」統・渡・セ)(4・17)

・鳥羽院(「院」の字ナシ) 統・渡・セ)とのへ(5・3)
 ・哥讚(「読」) 統・渡・セ(5・5)

・秋風たちし(秋風たちぬ) 統・渡・セ(7・12)
 ・あひたる「」(「こそ」) 統・渡・セ(13・14)

・世のうさ(同) **⑩**・**⑪**、「うち」統)に(23・4)
 ・ゑむよりけ(同) **⑩**・**⑪**、乗)統)おとしたり(23・18)

・このみ(「め」統・渡・セ)はおのつからとあり(27・8)
 ・ころ(同) **⑩**・**⑪**、ころ)統)もかならずかうはし(27・11)

・さて(「さは」統・渡・セ)とゝめをきて(27・32) 33)
 ・こそゆく(去年まで) 統・渡・セ)としのくれし(同) 渡・セ)「の」統)いとなみとも(29・1) 2)

(夏)

・むかし(同) **⑩**、むかしも) 統・セ) 覚えければ(1・8)
 ・いと(いと) 統・渡・セ) あはれのみまさりて(3・11)

・一(一) 渡、三) 統・セ) の滝の(5・6)
 ・三(二) 統・渡・セ) 日かの宮に(10・3)

・東の方さま(同) **⑩**・**⑪**、「さま」ナシ) 渡) へ(21・1)
 ・又こ(同) **⑩**・**⑪**、み) 統) えむことも(23・2)

・詠のすゑなり(「より) 統・セ、く迄) 渡(27・5)
 ・仙人な「と」の読給(同) **⑩**・**⑪**、「読経にや」渡) にや(27・17)

(秋)

・又(同) **⑩**・**⑪**、「み」) 統) かへりまいらぬ(9・5)
 ・ふるさとのつきは(「きは」) 渡・セ、軒端) 統(22・5)

・西をおかひける(「思ひける」) 統・セ、「おもひしる」) 渡) ころ(22・8)

・たれをととむすふ(「むつふ」) 統・渡・セ) へし(24・4) 5)

・ぬしなくなりたりし泉(同) **⑩**・**⑪**、「家」) 統) をつたへて(24・6)

・ふるきをおもふといふ(同) **⑩**、「いへる」) 統・セ) ことを(24・8) 9)

・まかりなましとおもひ（以下、一行脱文アリ「くたつ事侍しに弘法大師の御ゆ」続・渡・セ）（30・5）写真判定で紙継ぎはないとみられる。模写の証か。

・いかはかりなるちきりまし（ちきりせまし）続・渡、セ）とおほえて（30・7）

・ふるさとのかへりきつゝ（くきて）続・渡・セ）（32・2）（冬）

・ふかき「」（山）ノ字アリ、続・渡・セ（5・1）表装の際、裁断されたとみられる。

・卒塔婆の「の」ナシ 続、アリ 渡・セ）侍りけるに（8・2）

・御事の「の」アリ 渡・セ、ナシ 続）あはれさよ（12・5）御こ（御むこ）続・渡・セ）にとりたる（13・6〜7）

・おはして（はなして）渡、をはして 続・セ）侍り（13・15）まいらせ候はむといふ（同⑧・⑨、いふに）続）（15・16）

・けうまん（同⑧・⑨）「けうさむ」続（誤読カ）のほこり（同⑩・⑪）渡「ほとり」をよるこひて（20・5）

・名利の家（同⑩）、「家々」続・セ）の（20・9）
・吳（同⑩・⑪）、「靈」続 香（32・9）

右の点検を通して言えることは、ウィーン国立民族学博物館本の本文に最も近似性の高いのは、センチュリーミュージアム本（⑫15）である。次いで渡辺家本（⑬13）、続群書類従本（⑭4）の順という結果である。本文のおよその近似度を把握するのが目的であるので、三者共通して民博本に同じ場合は、数え

ない。

『続群書類従』本について、語彙の異同だけではなく、注目されるひとつに表記が新しいことである。民博本（渡辺家本・センチュリー本も同様）に比較して漢字表記が多いこと（⑮）に加え、送り仮名も多い。例えば、そのいくつかを掲げてみる。

夏₁第7段 四天王寺のかたへまいり侍けるに 侍りける

第10段 忍をもてこそ道心のほいといふこと 忍_ふをもてこそ

第13段 仙人などの説給にやと よみ給_ふにやと
いかゝし給と尋るに 尋_ぬるに

冬₁第6段 いとをしかり給し 給_ひし
こうした傾向は全体に及んでおり、民博本より時代の下った表記と言えよう。小松茂美氏は、『西行法師行状絵巻』の「解説」で、センチュリーミュージアム本は『続群書類従』本（底本は宮内庁書陵部蔵の写本二冊本）に詞書の本文が近似していること、後者は仮名を漢字に改めた箇所が少なくないこと。彼此比較して前者の本文に利があること歴然とし、次のように述べている。

この『群書類従』本の底本たる宮内庁書陵部蔵「西行物語絵詞」は、海田采女佑本（原本）から転写を重ねるうちに、書写者の私意により、随時随所の本文表記を改変したものの写本と考えられる。当然ながら、センチュリーミュージアム本が、優位に立つことはいうまでもない。むしろ

ろ、これらの誤写徴証から推定してみるかぎりにおいて、センチュリーミュージアム本が、まぎれもなく海田采女佑本の原本の姿を伝えることを証することが可能となるのである。¹¹⁾

とし、原本の直系模本と位置付けている。

まとめ

ウィーン国立民族学博物館本の出現とその価値について、これまでみてきたように、『統群書類従』本と比較してセンチュリーミュージアム本に詞書の本文が近似している。それにとどまらず、異体字「焔」(巻秋第12・1、32・11、34・4)、「呉」(32・4)等を共有するだけではなく、詳細は省くが、各行の文字の配置および歌の散らし書きに至る相似度は高い。これは他書に見られない特徴と言える。一方、(春)第4段に一行、(秋)第15段に一行、(冬)第9段に一紙分相当の詞書の欠失がある。写真判定で不鮮明ながら、ここに紙継ぎがないとする、書き忘れか、底本に欠落していたか、ということになる。他方、「くろきくも」(センチュリー本、「黒ききも」)巻冬、20・8「9」、「因果の白毫」(センチュリー本、「白豪」)同、20・10など優位性もある。いずれにしてもセンチュリーミュージアム本とともに海田采女佑本の原本の姿を伝える模写本であることは間違いない。

画図は忠実な模写である。ただし現状では、相応する詞書に画面が正しく対応していない箇所もある。これは本絵巻の継ぎ目離れの補修にかかる問題にとどまるものではないかもしれ

ない。¹²⁾『統群書類従』本の奥書は、明応九年正月中旬に各段の文字(詞書)は愚翁が書写し、画図と合わせて編纂した、の意でその際に生じた錯簡でもあったのかもしれない。

注

- (1) 小松茂美編『西行法師行状絵巻』続々日本絵巻大成 伝記・縁起 篇3 中央公論社 一九九五年 七三頁
- (2) 大正十五年へ一九二六 刊行 第三十二輯上・雑部
- (3) 注(1) 七七〜七八頁。および、『日本絵巻大成』26 中央公論社 一九七九年 一七六〜一七七頁
- (4) 「宗達本『西行物語絵巻』論考」(『日本絵巻大成』26) 一七七頁(後藤昭雄)「日本感霊録」の佚文断簡―選者のこと、流伝のこと―(『南都佛教』第八十一号 平成十四年二月 四九頁)
- (5) 「第五章 渡辺家本『西行物語絵巻』の復原とその価値」(『日本絵巻大成』26) 中央公論社 一九七九年 一九五頁
- (7) 注(4) 「西行物語絵巻の復原」注3 中央公論社 一九七九年 一六二頁
- (8) 注(1) 七八頁
- (9) 小松茂美編『西行法師行状絵巻』(続々日本絵巻大成 伝記・縁起篇3)中央公論社 一九九五年)所収。平成二年(一九九〇)の春ころ、アメリカ、ニューヨーク市のオークション会社クリスティーズの入札カタログに「西行物語絵巻」(四巻)の出品が掲げられ、現在はセンチュリーミュージアム所蔵。一〇一〜一〇二頁
- (10) 小松茂美氏は、「注(1)」論文の中で、次のように述べている。
底本たる宮内庁書陵部蔵「西行物語絵巻」は、海田采女佑本(原本)から転写を重ねるうちに、書写者の私意により、随所随所の本文表記を改変したものの写本と考えられる。(一〇一・一〇二頁)

右の「改変」の一つに仮名書きを漢字に改めたことがあげられる。

(11) 注(9)に同じ。

(12) 海田采女佑本の模写に大きな錯簡の見えることは、小松茂美氏が黒川春村の指摘「今、これを見るに、毎段錯乱多かるは、継目はなれたるを、みだりに修補したるものならむ」(『考古画譜』(巻第五)の黒川春村の補注)を引いて説明している(注6 一九二頁)。

○ 実物調査にあたっては、肉眼では見落としがちな巧妙な紙継ぎに悩ませられる。めだたない巧妙な紙継ぎについて、千野香織氏は、徳川本西行絵巻について次のように述べている。

二枚の料紙を上下に重ねて貼り合わせてあるのではなく、平らに並べておいたまま継いでいるようにみえる。そしてこの目立たない巧妙な継ぎ方は、ここばかりではなく、じつは徳川本全体に及んで施されていることが、昭和五十一年十二月、秋山光和氏を中心とした本絵巻の光学的調査を行った際に明らかとなった。つまり従来は、いわゆる普通の紙継ぎと、こうした特殊な紙継ぎのうち比較的目立つ数箇所だけを取り上げ、これらを同列に扱ってきたことになる(『西行物語絵巻』の復原)

『日本絵巻大成』26』一六三頁「注6」。

(本研究は平成19年度科学研究費補助金による)

法 量 表

ウィーン国立民族学博物館蔵

『西行記 秋』

(所蔵番号113・894 Japan)

縦32.1糎

紙 数	横 (糎)		詞 (行)
第1紙	36.6		10
第2紙	44.3	絵一	
第3紙	30.0		11
第4紙	44.8	絵二	
第5紙	53.0		16
第6紙	49.8	絵三①	
第7紙	28.0		10
第8紙	90.0	絵四	
第9紙	40.8		15
第10紙	92.6	絵五①	
第11紙	46.0	②	
第12紙	34.3		12
第13紙	90.5	絵六①	
第14紙	29.8		11
第15紙	89.6	絵七	
第16紙	32.8		8
第17紙	46.6	絵八	
第18紙	45.3		15
第19紙	46.0	絵九	
第20紙	40.0		12
第21紙	44.0	絵十	
第22紙	45.4		14
第23紙	45.8	絵十一	
第24紙	41.8	絵十二	
第25紙	45.8		14
第26紙	31.0		11
第27紙	44.8	絵十三	
第28紙	50.1		17
第29紙	44.8	絵十四	
第30紙	31.6		10
第31紙	45.2	絵十五	
第32紙	39.2		13
第33紙	8.8		3
第34紙	24.0		9
第35紙	89.4	絵十六	
合 計	1,642.5		211

見返し 37.6 軸付紙 14.5

ウィーン国立民族学博物館蔵

『西行記 冬』

(所蔵番号 113・895)

縦32.1糎

紙 数	横 (糎)		詞 (行)
第1紙	39.3		14
第2紙	89.8	絵一	
第3紙	11.4		4
第4紙	18.2		6
第5紙	26.5		10
第6紙	92.0	絵二①	
第7紙	37.0	②	
第8紙	39.6		11
第9紙	46.4	絵三	
第10紙	47.4		11
第11紙	45.6	絵四	
第12紙	20.8		7
第13紙	36.4		13
第14紙	45.6	絵五	
第15紙	51.3		19
第16紙	41.2		14
第17紙	91.2	絵六	
第18紙	23.8		6
第19紙	91.0	絵七	
第20紙	66.6		23
第21紙	45.6	絵八	
第22紙	44.8		15
第23紙	45.0	絵九	
第24紙	49.6		14
第25紙	45.6	絵十	
第26紙	46.0		15
第27紙	45.6	絵十一	
第28紙	46.8		16
第29紙	90.6	絵十二	
第30紙	23.4		7
第31紙	45.8	絵十三	
第32紙	77.6		28
合 計	1,567.5		233
見返し	38.0	軸付紙	48.2